

## 目次

### 勝利を信じた人々

- 君国援勇さんの秘話 (一) 郷土部隊四二連隊奮戦記 (二) 無残・徳山海軍燃料廠 (三) 細迫兼光氏の特攻隊志願 (五) 県民献納の飛行機も戦場へ (六) 特攻〃回天〃南太平洋へ出撃 (七) B 29 撃墜の小月航空隊 (九) 宇部市に生まれた民兵 (二二) 悲劇の人造石油工場 (三三) 銅像もタスキがけで出陣 (一四) 歓楽街の灯は消えて (二五) 松陰精神に県民を集中 (二七) 消えた下関要塞のベール (二八) 光海軍工廠の建設から壊滅 (一九) 消えた豪華な関釜連絡船 (三二) 岩国陸軍燃料廠物語 (三三) 顕官往來の山陽ホテル (二四) 下関重砲兵連隊始末記 (三五) 飢えを救った〃朝作戦〃 (三七) イ 58 号潜水艦帰投せり (三六)

### 飢えを乗り越えて

- 抗戦叫ぶ防府の特攻隊員 (三〇) 山口にきた占領軍の功罪 (三三) 根性で勝ちとった町議 (三三) 娯楽復活は映画から (三五) 軍人写真の焼き捨て事件 (三六) 占領軍に抗し学校を守る (三六) 婦農根性に希望の灯ともす (四〇) 農地改革と菊屋菘市長 (四二) 一兵士の描いた復員双六 (四三) 戦禍から緑と花の町づくり (四四) 死刑を免れた戦犯将校 (四六) 〃白の無罪〃山本下関署長 (四八) 愛の小包み、いまもつづく (四九) 〃踊る神様〃颯爽と登場 (五一) 民主警察に婦人警官 (五二) 光市の千切り大根事件 (五四) 戦後初の総選挙は一区制 (五五) 県民の保有米 82 日分と発表 (五六) 引揚者の町の二家族物語 (五九) 無罪だった戦犯将校 (六一) 憎しみは国境を越えて (六二) 今澄・太田氏が県労連結成 (六三) 徳山曹達の九十九日スト (六五) 悲劇の満洲開拓団の全滅 (六七)

### 秩序維持に県民の力

- 廃虚に文化の灯かかげて (六九) 多難だった県連婦の結成 (七〇) 第一回下関の復興みなと祭 (七三) 初の公選知事に田中竜夫氏 (七三) 山陽本線恋ヶ浜列車転覆 (七四) 二・一ストに反対の中学生 (七七) 県

連合青年団も誕生(七九) 光工廠跡に民間企業進出す(八二) 炭鉱国管事件と宇部市(八三) 彼岸花から  
 ウィスキー造り(八四) 下関市で最大の長府町大火(八六) 全市の医師で徳山博愛病院(八八) 終戦前後  
 の萩焼窯元の苦勞(九〇) 天皇さま県下ご視察(九二) 婦人を襲った関の小平(九四) 宇部の労組人  
 民裁判事件(九六) 市町村に自治体警察誕生(九八) 青海島が脚光あびるまで(一〇〇) 徳山市の隆盛  
 生んだ博覧会(一〇三) 県下十六万農家の農協誕生(一〇四) 軍艦沈めて防波堤づくり(一〇六) 公職追放の嵐  
 県下にも吹く(一〇七) 大島郡で少年虐待の梶子事件(一〇九) スタートした県教委の歩み(一一二) 宝ク  
 シが描く悲喜劇二つ(一二三) 誕生の県警音楽隊街頭へ(一二五) 都濃郡南陽町の分離と独立(一二七) 山口ミ  
 カン東京へ進出(一二九)

### 試練にも耐えて

皇太子さま、山口県へ(二二〇) 強くなった女性の地位(二二三) デラ台風で遭難の光の漁船(二二三) サビエ  
 ル四〇〇年巡礼団(二二五) 大島沖の戦艦陸奥の引揚(二二六) 県民待望の山口大学誕生(二二八) シベリ  
 ア引揚げとこども会(二二九) 米軍政本部が民事部になる(二三三) ギャンブル防府競輪の難産(二三三) 日立  
 笠戸の婦休制に反対(二三四) ウラニウムにかけた夢?(二三五) 砲弾引揚げとイペリット弾(二三七) 権威あ  
 る県芸術文化賞制定(二三八) 戦争未亡人の白菊会生れる(二四〇) ハゲを治す脳下垂体移植(二四二) 観光地  
 百選に三カ所入選(二四三) いまもナゾの八海事件(二四五) 米軍機のタンクが落下(二四七) 観光地

### 講和から復興へ

恐怖の海・李ラインの脱出(二四八) 国宝焼失の防府天満宮炎上(二五〇) 下関から中共へ密出国事件(二五二)  
 宇部で起った万来町事件(二五三) 再建・錦帯橋の渡りぞめ(二五四) 八幡製鉄の進出で光市発展(二五五) 小  
 中学生の赤い日記事件(二五六) 田中・田舛選手世界卓球へ(二五六) 岩国と島根を結ぶ岩日線(二五九) 山口  
 市仁保の惨虐六人殺し(二六〇) 防府の自衛隊両基地誕生(二六三) 宇部の殺人鬼つかまる(二六四) 観光ブー  
 ムの秋芳洞と秋吉台(二六五) ポストンマラソン浜村優勝(二六七) 熊毛郡八代のツル物語(二六八)

### 幸せをもとめて

県民待望の山口放送誕生(二七〇) 両陛下をお迎えした植樹祭(二七二) 大島の新産業「真珠づくり」(二七三)

岸・佐藤兄弟総理の誕生(二七四) 関門国道トンネル開通(二七六) 夏の野球に柳井高校優勝(二七七) 岩国基地短銃盗難のお手柄(二七九) 理想像つくる長門高校(二八〇) 安保闘争と田布施町の騒ぎ(二八三) 岩国と大島の姉妹縁組(二八三) 下関商高がセンバツ優勝(二八五) 日本で一つ々彫刻のある市々(二八六) 下関市に革新木下市長誕生(二八八) 史上最高の山口国体(二八九) 25年ぶり復元した景清洞(二九二) 学テ紛争で中学校長自殺(二九三) 杉道助氏の死と萩市の悲しみ(二九四) 片腕の一塁手吉田君のその後(二九五) 取材記者は語る(二九七)

# 勝利を信じたた人々

## 君国援勇さんの秘話

柳井市伊保庄の現国立柳井療養所に、第五師団（広島）管下の西部第八部隊がいた。終戦時、この部隊は鳥居少佐Ⅱ香川県丸亀出身Ⅱの率いる十二個中隊で、兵力は四千八百人だった。この部隊は補充兵を訓練して戦場に送りだすのがおもな任務で、柳井市古市でいま文房具商を営んでいる君国援勇Ⅱクンコク・エンユウⅡ（六一）も少尉で、中隊長をしていた。君国は三回も戦場の死線をくぐり、そのたびに名前をかえたという人。

君国は広島県世良郡世良町出身で第一回は昭和十二年十一月の華中戦線で「真野勇Ⅱ」という生まれかたの名だったが、右肩などに貫通銃創をうけたまま行方不明になった。このため師団では「真野勇少尉行方不明Ⅱ」として、後任の中隊長を決めた。君国は貫通銃創で失神、気がついたときは友軍の影もみえなかったといっている。食べものもなくまる二日間、戦野をさまよったが、敵中突破のため昼間は行動することが

できない。夜間、星空だけをたよりに歩きやっと友軍陣地にたどりついた。民家の土間に急造されていた蘇州野戦病院で簡単な手当をうけ敵の弾丸が右肩にはいったまま、他の負傷兵といっしょに前線へ、南京へと半年もかかって歩きつづけた。ところが君国の部隊では、行方不明の公報をだし、後任の中隊長も決まっていたため、名前を「柴田勇少尉Ⅱ」とかえた。日本の軍隊では戦死や行方不明の公報がでたものを取り消すことは認められなかった。

やがて部隊転属で、君国は一応、内地に送還されたが、郷里へ立ちよることなどもちろん許されない。こんどは第五師団の船舶工兵隊将校として、十六年十二月シンガポール作戦に出発した。「死に場所をみつけ、名誉ある戦死をⅡ」というのが、君国への軍の命令であり、君国自身の願いでもあった。ところが華中で右肩に受けた傷あとが再びいたみだして悪化、途中から内地へ送還された。歯ぎしりした君国は、改めて生まれ変わったつもりで心に誓い「君国を勇んで援けるⅡ」と自分ですすんで君国援勇と名づけ、終戦直前の十九年十二月輸送船の黒潮丸でレイテ決戦場に向かったが、このときも

台湾沖で奇跡的に黒潮丸だけが敵潜水艦の攻撃からのがれ、高雄港内にたどりついて座礁、九死に一生を得た。

「わたしは三度も戦死しかけて生き残ったのですから、こんどは商売に転進、君国のために働き、みんなを援けたい」と君国は終戦後、郷里にも帰らず、最後の軍隊生活をすごした柳井市に住みついた。君国の戦後の転進は立派に成功、いま平和な一家をかまえた君国家は奥さんの節代（五〇）と長男、泰照（二〇）と力器調律師と力を合わせ、文房具店と楽器店を経営している。

### 郷土部隊四二連隊奮戦記

山口県民を中心に編成した郷土部隊―歩兵第四十二連隊は全国にも勇名をはせた精強部隊であった。大原攻略をはじめ華中・華南から南方戦場へと、終戦まで九年間、四十二連隊の主力とともに転戦した丸谷順助大隊長（終戦時）と大佐、山口市大殿大路、六十四才の話をきいてみよう。

華北の大原攻略のとき、私は第一中隊長として折口鎮の最前線で指揮をとった。華北の十月半ばすぎは、昼はまだ暑いが夜の寒気はきびしい。中隊二百余人に対し十倍をこす敵兵だった。それを倒すとすぐにまた新手の敵兵がくりだしてく

る。とうとう中隊で戦闘できるものは十四、五人になった。機密書類を焼き、たった二本あったタバコをみんなが一服ずつ吸い「いまから突撃する。その前に連隊歌を合唱しよう」と、傷ついた兵隊もいっしょになって大合唱した。いまから全員戦死！と思うと泣けて仕方なかった。合唱は山すそにこだまし、つづいて万歳を三唱した。突撃である。傷ついた兵隊も「はってでもいっしょにいきます」といつているとき、監視兵が「敵兵が退却をはじめました」と報告してきた。喜びというよりも驚きました。大合唱に、まだたくさんの生存者がいるとカンちがいたのでしょう。この山をあとで

「丸谷山」と師団長から名づけてもらいました。

日清戦争の終わった明治二十九年十二月、軍旗を奉じて生まれた四十二連隊が、一番はじめに活躍したのは日華事変の大場鎮の戦いである。覆面部隊「鯉」として華北に転戦「山口の部隊は生命知らずだ」といわれ、華北長城線の「山口山」の戦闘では三百余人の戦死者をだし、その遺骨が留守部隊に帰還したとき、山口市民はあげて泣いて出迎えた。

当時、山口市民は戦勝のちようちん行列、祝賀会と勝利の夢の明け暮れだった。そして第二次世界大戦に突入。四十二連隊は「鯉」のほか「槍」「藤」部隊を編成「鯉」は山下奉文將軍の第二十五軍に所属してマレー半島攻撃に参加、昭和十六年十二月八日、日本の運命を大きくかえた第二次世界大戦が起こった日、マレー半島のタイ・パタニーに強行上

## 光工廠跡に民間企業進出す

終戦前日の八月十四日。大爆撃をうけて壊滅した光海軍工廠の幕切れは、あわたたしなかった。さかんなところは六万人もいた光市民だが、終戦で工廠の従業員・徴用工・動員学徒らがどっと帰郷したあとは人口も三万をわり、火の消えたようなさびれ方だった。しかし「光市をもとのようににぎやかな市に」という市民の努力で、工廠軍需施設の転用第一号として、武田薬品が進出、つづいて八幡製鉄も大きな工場を建設。焼けただれた鉄骨のなかから「薬と鉄」の平和産業が生まれてきた。

武田薬品の進出には、当時の磯部貞次市長「三十年死亡」の思いつきが誘致に成功、ヒョウタンからコマが出るというありがたい話があった。当時は食えることがせいっぱい。工廠あとに工場を誘致するなど、だれも考えつかなかった。磯部市長も工廠の下士官集会所・独身寮・工員住宅などを国から払い下げてもらい、市民の住宅にしようという考えしかなかった。山本雷造市議（七〇）のち光市長、現在は農業とともに、米やイモのはいったりユック・サックを背負って上京したのは終戦から一カ月もたない九月。工廠管理の海軍艦政本部「当時は残務整理にあたっていた」に陳情したが「占領軍の意見を聞かなくてはわからない」というだけで、

どこにどう相談すればよいかわからなかった。

旅館に引き揚げマクラをならべて寝たが「手ぶらでは帰れない」という気持で眠られない。ふと磯部が「武田薬品が工場を新設するそうだが、一か八か、誘いをかけてみよう」といいだした。大阪にある本社に話をもっていくのがスジだが、せっかく東京にきたのだから：と同社東京支店へ。小西新兵衛支店長（五七）「現同社専務」の返事は「重役会議で三重県四日市市に工場新設を決めたばかりで：」ということだった。どうせダメならと、山本雷造がイスから立ち上がりまくしたてた。「工廠の本館はほとんどそのまま、いますぐにでも使えます。地下室には工廠時代の資材も残っているので、大工場建設といっても、人手さえあれば楽にできるのに：」この話を耳にして、とたんに小西支店長の顔色が変わった。帰りかける二人を、もう一度、とイスにすすめ、本館の広さは、地下室はどうなっているかと質問「光市への進出を重役会にはかってみるので、しばらく待ってほしい」ということになった。こうして思いもかけなかった武田薬品の進出が約束された。

武田薬品は外地からの引揚者をかかえ、一方、引揚者受け入れの防疫用に、占領軍から発疹（しん）チフスのワクチン増産を引き受けたばかりで、どうしても急いで工場を新設しなくてはならなかった。占領軍からも工廠あと使用のOKがでた。二十一年二月十二日、全国の軍施設転用の第一号にな

り、武田薬品光工場建設事務所」の看板があがった。

その計画によると、工場あと二百六十七万平方メートルのうち、五十九万平方メートルを使用。従業員はとりあえず二百六十三人。当時、経理課に勤務していた御石保男(三九)「現光工場庶務係長」が「毎日、鉄クズのあと片づけで、バタ屋と同じ仕事でした」と語っているように、爆撃の残がい整理で、どこから手をつけてよいかわからなかった。二十二年一月五日に、焼けなかった本館(鉄筋コンクリート四階建)の半分を使って製造した発疹チフス・ワクチン七十九リットルを初出荷した。寒風の吹きつけるなかを、初代工場長・中村為雄(七一)「現武田薬品顧問」はじめ全従業員が正門前に整列、ワクチンを積んだ木炭トラックが走りだすと、バンザイと拍手がわいた。

その後、武田薬品は二十八年十二月になって、さらに工廠跡の払い下げをうけ、周辺の土地を買収して、敷地は七十一万平方メートルになった。製造部門も拡張につぐ拡張で、いまでは従業員は千七百十四人、各種ワクチンから栄養剤、農薬、肥料まで七十三種類をつくりだす総合化学工場に育っている。

武田薬品から九年のち、八幡製鉄が三十年五月十八日、百七十八万平方メートルに光製鉄所を開設した。二十六年の光市長選に「工業都市建設」を公約して当選した松岡三雄現市長(六一)は、八幡製鉄の誘致に努力した。工場があったところだけに立地条件も、水も十分。県や親類の岸さん、佐藤さん兄

弟にも協力を頼み、二十八年一月十六日「八幡製鉄光建設局」が設置され、本社から吉田実建設局長(六二)のち初代光製鉄所長、現堺製鉄所長「」が着任、二十八年十月五日から線材工場の建設工事をはじめた。

光製鉄所庶務課勤務の小林平八(四一)は当時の模様を「敷地のなかには小さな山もあり、キジやタヌキができました。工事がすすむにつれ、ハツパの音で、キジはいなくなりました。工がタヌキが飛び出し、とうとう四頭を生けどりにしましたヨ」といっている。三十年一月十二日に吉田所長のスイッチで工場は始動。加熱炉から流れだす赤い鉄棒を、つぎつぎに細くして、線材にする作業は秒速最高二十四メートル、一本の鉄棒から四本の線材をつくりだす最後の工程「四本通し」の圧延テストも四月二十四日に成功した。建設局時代だった五十七人であった作業員は、いま千九百八十三人にふえ、製鋼・鋼板・条鋼など、工場がたくましい鼓動をつづけている。

さらに三十三年には八幡鋼管「従業員五百三十六人」も進出して、現在三工場の従業員は四千二百三十三人、その家族をふくめると光市の全人口四万余人の三分の一を越える。市の予算八億三千万円のうち、三工場の固定資産税は一億八千七百七十万円(三十九年度)また法人市民税(三十八年度)一億三千七百四十万円のうち、三工場が五千七百万円を引き受けている。工場の街、光市はこのようにして再び工都としての繁栄をみせている。

たほど。レパートリーは交響楽から流行歌、民謡、ジャズなど、幅広い要望にこたえるため、二百曲は用意しているといっている。

練習時間は毎週火・木・土曜日の午後からと、土曜日の午前中をあてているが、練習場は県警体育館内の弓道場。ドロボウを捕えたり、交通整理に追われ、なかなか全員がそろわない。「山口の県警音楽隊は、専従音楽隊の体制をとっている福岡県警音楽隊と、ほぼ同数の出勤回数を記録しています。それだけに隊員にも自然無理なスケジュールになりますから、なんとか専従隊員」注・現在、十二人採用しているが、実際にはいずれも兼務Ⅱをふやすこと、また専用の練習場を、つくってもらおうこと―が私の夢です」と梶田は訴えている。

## 都濃郡南陽町の分離と独立

都濃郡南陽町は徳山市にとりかこまれている。二十三年夏、南陽町が徳山市から分離、独立する騒ぎのとき、視察にきた鈴木自治庁事務次官は「マンジュウ型の町」と表現した。マンジュウのアンコが、南陽町というわけである。それが戦時中の昭和十九年四月一日、軍命令で徳山市に強制合併させ

られた。南陽町Ⅱ当時は富田・福川両町Ⅱの人たちは内心不満であったが、軍命令という絶対的なものには勝てず、シベシブの合併であった。それが終戦……。軍の威力はなくなった。そして新しい地方行政が生まれた。富田地区民は「軍から無理に合併させられたのだから、自分たちの意思で元の姿に返ろう」と分離宣言をした。

旧徳山市は街の八〇％が戦災で焼失しているが、富田地区は東洋曹達工場の倉庫に爆弾一発が落ちただけ。無キズの町といつてよい。さらに富田地区から年間七百万円の固定資産税が徳山市役所にはいつているが、富田地区への見返りはたった二十四万円。戦時中の合併前、徳山曹達と東洋曹達の二大工場を誘致して「これで町財政がやっとな豊かになった」と喜んでいたので強制合併され、しかも七百万円のうち二十四万円しか返ってこない徳山市役所のやり方はひどいというのが分離、独立の大きな理由である。さらに徳山市と富田町の仲が悪かった。

分離、独立の主役だった県議・徳原啓（六三）Ⅱ南陽町富田Ⅱは「私がこどものころ、小学校の対校野球などのとき、相手がほかの町ならそうでもなかったが徳山市だったら絶対負けるナ」とこども心に教えられたものです」といっている。この「金と仲の悪さ」は分離に拍車をかけたが、面白い話がある。

二十二年四月、徳山市で戦後初の市長選挙が行なわれた。



長谷川藤七、玉野三平両候補が争った。勝敗は最後までわからぬという激戦であった。そのとき富田地区から両候補に「富田地区の分離に賛成か、反対か」の公開質問状を出した。玉野候補ははっきりと「分離は反対である」と回答、長谷川候補は「検討する」とふくみをもたせた。これを富田地区民は「住民が希望するなら分離もやがなし」と解釈、長谷川にこぞって投票した。この集団投票が長谷川市長を産み出したといつてよいだろう。当選後、新市長は「周南都市合併・人口三十万の都市づくり」という青写真をかけ、富田地区民が「約束がちがう」と市役所におしかけたこともあった。

徳山市を相手にせず—これがつづいて分離、独立の運動に立ち上がった富田地区民の考えであった。その第一弾として富田地区から出ていた市議五人は、市議会議長・椎木進一（五〇）「現山陽タンカー社長」とともに二十三年夏、そろって辞任した。さらに第二弾は新しい地方自治法ができるらしい—という中央情報で徳原県議がさっそく上京。「戦時中、無理に合併させられた市町村は、住民投票で分離することができると聞きこみ、勇んで帰ってきた。戦時中に流行した回覧板を大いに利用し分離して豊かな生活をPRされ、また辞任した市議たちは、公民館などで分離演説をはじめ、住民の間のムードを盛りあげた。」

二十三年十月二十三日。投票日である。徳山市からは「分離反対」のノボリを立てたオート三輪の列が富田へくりこ

む。これを迎えて富田側もオート三輪をくりだす。「反対」の賛成の声スピーカーからワンワンとこだまして戦場のような騒ぎ。だが富田地区民の団結は強く、結果は分離賛成五千九十九票、反対三百三票で、住民投票の九四・四一％が分離派であった。ただちに県議会に「富田地区分離」の承認をもとめる手続をとったが、長谷川は高姿勢であった。新法の自治法付則二条に「分離は地区住民の三分の一以上の署名があつても、市町村議会、県議会の議決が必要」をタテにおし、このため県議会も承認しなかった。

しかし、富田地区の人たちは、あきらめなかった。蔵永亀正（六四）「現南陽町商工会長」らが中心になり、住民の十円カンパで氣勢をあげ、たちまち二十四万円が集まった。徳原らはこの資金で陳情団を五十三回もくりかえし、くりかえし県庁へ送った。打つ手はうったがダメ。最後の手段と米軍山口軍政本部へ直訴した。一週間もたたないうちにデービス軍政官から、田中知事と県議会へ「富田を分離すべし」という声がひとことかかった。しかし、一事不再議の議会の権威から、徳山市議会が分離に賛成、これを県議会が承認するとうる苦しい妥協案がつくられたが、徳山市議会はあくまでも反対した。傍聴にきていた軍政本部の係官があわててデービスへ電話報告。白いヘルメットにMPの腕章をつけた憲兵を先頭に、デービスがじきじき市議会議場に乗りこむ一幕もあり、富田の分離がシブシブながら、市議会をとらえた。

ペン・フレンドが生まれ、これを知った土肥岩国市長らが「少年たちの純粋な友愛を生かそう」と考えていたとき、ゲルバート市長から姉妹縁組を結びたいという手紙がとどいた。土肥は市議会にばかり、正式決定を待って帰国することになったアグニーにメッセージを託し、両市の交流がはじまった。三十八年にはエベレット市から親善使節が岩国へ。三十九年には土肥夫妻がお礼の使節として訪問した。最近両市の間に交換学生の話がすすみ、岩国市は来年エベレット市へ一、二名の高校生を派遣する計画で、すでに候補者十人を対象に、早手回しの人選をはじめている。岩国市といい、大島郡といい、姉妹縁組には、いつも高校生が先頭に立ち「親善の大役」を担っているのもたのしい。

## 下関商高がセンバツ優勝

関門の夜空にあがる花火。車道まではみだしに歓迎陣。そのなかをぬうようにして進むジープ。春の「センバツ」で優勝した下関商高ナインの下関市内パレードである。「勇者は帰りぬ」を演奏するペンギン・シスターズ、林兼産業女子従業員四十数人で編成のメロディーも歓声にのまれて聞こえない。下関署の推定では十五万人の人出だった。この日、三十八年四月七日は朝早くから小雨。バスで前夜、

甲子園を出発した選手一行は、午前五時すぎ岩国市を通過、河村達也校長（六三）「現九州産業大講師」はじめ同校同窓会員が待ちうける防府市公会堂へ。つづいて山口市から宇部小野田両市を通過して下関市に帰ってきた。県庁広場の歓迎会も、宇部、小野田両市役所前も、さらに沿道も「バンザイ」「バンザイ」の渦。県警本部の推定では県民あげての歓迎で人出は約五十万人にのぼった。

陸上自衛隊山口駐とん部隊は「晴れの選手たちの顔を、県民にみせてやろう」とジープ七台を防府から下関まで派遣。また県も、同年秋の山口国体を前に「さいさきよし」と国体事務局の荒瀬三郎総務部長（四九）「現県教委社会教育課長」や福井研造演技部長（五二）「現県教委総務課長」らが国体準備を一応ストップして歓迎準備にきりかえた。下関市役所前広場の優勝報告会は、一万人を超える市民にかこまれ、大優勝旗をもつ佐野芳徳王将（一九）「現明大二年」の手は感激で小さきみにふるえていた。小田明野球部長（三六）「下関商高教諭」は「一戦、一戦、試合も苦しかったが、それよりも心のこもった歓迎にどうしてよいのか、アガりました」と当時を語っている。

昭和三年から十一回目の「センバツ」出場で優勝をとげた名門、下関商高の栄冠への道をふり返ってみると、池永正明投手（一八）「現西鉄球団」は大会屈指の名投手と注目をあびていただけに、相手校にマークされ、戦いは苦しかった。

優勝までの五試合のうち三試合が逆転勝ちだった。

第一戦は地元の明星高、池永の好投と全選手の打線が火をふき5―0で勝った。二十七年と三十六年のセンバツで一回戦に敗れているだけに「優勝を考えるな。一戦、一戦を着実に戦いとれ」という猛練習の成果といえよう。高野繁也監督(三〇) 日本漁網船具下関営業所と小田野球部長は「第一試合に勝ち、校旗がメイン・ポールにひるがえるのを見たとき、優勝したときよりも感激が大きかった」といっている。第二戦は優勝候補の海南高と和歌山県。池永の不調な立ち上がりをつかれて失った2点も、5回で同点。熱闘16回裏に池永のサヨナラ安打で3―2と逆転してスタンドをわかせた。

準々決勝、御所工高と奈良県との対戦は、優勝街道の最大のヤマ場だった。高野監督が「この試合は負けたと思った」とあとでいっていたほどの苦戦。御所は5回裏、三本の長短打をつらぬいて2点を先取、下商の反撃も8回表までに四球で二走者が出ただけ。いよいよ9回表の最後の攻撃、トップ打者、四番の佐野が左前に三塁打した。チャンスにのって池永四球のあと代打・村上貢選手(一九) 現三菱造船長崎造船所が三塁右をぬく安打で1点。つづく二つの内野ゴロで池永も生還して同点。加治善昭選手(一八) 現駒沢大一年が右翼に二塁打、一塁走者がかえって逆転した。

準決勝の相手は、また強豪の神港高と兵庫県。6回に1点

をとられたが、池永がその後をよく締めた。下商は6回裏、清田幸男選手(一九) 現国学院大二年の三塁打と西村毅選手(一九) 現法大二年の安打で同点。7回裏に三本の長短打と1四球で3点をあげ、4―1で押しきった。

つぎはいよいよ決勝戦。高野監督は全選手を宿舎に帰すと決勝進出をかけた早稲田実業―北海高と北海道を観戦した。勝った北海の豪快な打撃をみているうち「よし、勝てる」という自信がわいた。宿舎の作戦会議では「北海は内野の肩は強いが、ダッシュがない。バントを使って戦う戦法にできる」と簡単な指示をしただけ。選手たちも一人々々ことば少なうなずいていた。

この一戦に、下関市から数台のバスをつらねた新手の応援団が強行軍してかけつけ、熱気のもった応援と、高野監督の作戦が当たって、一方的勝利に終わった。得点は3回4点4回4点、さらに6回と8回に各1点をあげ、10―0という大差をあげた。抱き合って喜ぶ選手たち、アルプス・スタンドをゆるがす応援団の歓声、紙吹雪が飛び、五色のテープが流れた。念願のセンバツ優勝を下商が勝ちとった瞬間である。

## 日本で一つ々彫刻のある市

宇部市のメインストリート、市役所前の裸婦像、真締川



(上) 竹ヤリをもって下関市武久町婦  
人会員の猛訓練、18年うつつ

(中) 回天特別攻撃隊平生基地司令か  
らハチマキをしてもらい出撃す  
る水井淑夫少尉。20年8月12日、  
同少尉はアメリカ船団に突入し  
て戦死。

(下) 下関商業学校生徒たちのグライ  
ダー訓練、18年9月うつつ



この絵は山口市役所社会教育課長補佐・内田伸氏に終戦時まで独立歩兵百三十三部隊、兵長に華中湘陰で終戦を迎え、翌二十一年五月、佐世保に復員するまでをタタミ一枚大の紙に描いたもので、内田さんは「復

